



特 許 願 (A)

⑬ 日本国特許庁

公開特許公報

昭和 51 年 1 月 30 日
特許庁長官 青 島 英 雄 殿

1. 発明の名称

ランタン系白金系金属触媒
窒素酸化物除去用触媒

2. 発明者

ランタン系白金系金属触媒
神奈川県横浜市西区南幸 3-1-1

田 畑 隆 雄

3. 特許出願人

神奈川県横浜市神奈川区室町 3 番地

(599) 日産自動車株式会社

代表者 青 島 英 雄

4. 代理人

所 〒100 東京都千代田区麹町 3 丁目 2 番 4 号

岡山ビルディング 7 階 電話 (381) 2241 番 (代 22)

(5925) 氏 名 弁護士 杉 村 隆 秀

⑪ 特開昭 51-91890

⑬ 公開日 昭 51. (1976) 8.12

⑫ 特願昭 50-11856

⑭ 出願日 昭 50. (1975) 1.30

審査請求 未請求 (全 4 頁)

庁内整理番号

6F12 4A

730F 4A

6P41 32

⑮ 日本分類

13H19/11

13H7A/11

F1 D/1

⑯ Int. Cl.²

B01J 23/76H

B01J 23/46

B01D 43/24

F01N 3/15

明 細 書

1. 発明の名称 窒素酸化物除去用触媒

2. 特許請求の範囲

次の一般式



(但し $\alpha + \beta = 0.2$, $0.1 \leq \alpha \leq 0.2$, $0 \leq \beta \leq 0.1$, $0 \leq r \leq 0.4$, L は La または Y の単独または複数元素、A は Fe または Ni の単独または複数元素) で表わされる複合酸化物から成ることを特徴とする窒素酸化物除去用触媒。

3. 発明の詳細な説明

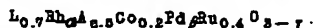
本発明は排気ガス、特に自動車の排気ガス中の窒素酸化物の除去に好適な窒素酸化物除去用触媒に関するものである。

最近の自動車の排気ガス規制において、排気ガス中の窒素酸化物を除去する方法の一つとして触媒を用いる方法が考えられている。これまで白金系金属、金属酸化物などの触媒が多く研究されているが、これ等の触媒は欠点が多く、実用に供する程度に性能の良い触媒は開発されていない。

例えば白金系金属触媒は自動車の燃料に含まれる鉛による被毒が著しく、また金属酸化物は酸化還元剤、あるいは還元剤環境で用いられる場合、時間の経過と共に触媒自身がその環境により変化してしまい欠点がある。最近これらの環境に強い触媒の代り、ペロブスカイト型の結晶構造を有する金属の複合酸化物を触媒として用いる方法が考え出されている。これらの触媒は各種環境に強いという利点はあるが、窒素酸化物の除去という点で未だ十分の性能を有するものはない。

本発明の目的は上記従来の触媒の欠点を無くし、窒素酸化物の除去率が高く且つ寿命の長い排気ガス用の窒素酸化物除去用触媒を提供せんとすることにある。

このため本発明の触媒は次の一般式、



(但し $\alpha + \beta = 0.2$, $0.1 \leq \alpha \leq 0.2$, $0 \leq \beta \leq 0.1$, $0 \leq r \leq 0.4$, L はランタン La またはイットリウム Y の単独または複数元素、A は鉄 Fe またはニッケル Ni の単独または複数元素) で表わされる複合酸

化物から構成されることを特徴とする。

すなわち本発明の腐食阻害剤の組成は好適な触媒はランタンまたはイットリウムの単独または複合元素と、ロジウムと、ニッケルまたは鉄の単独または複合元素と、コバルトと、パラジウムと、ルテニウムとのペロブスカイト系の結晶構造を有する複合酸化物より成る。

上記本発明の触媒の組成において、ロジウムとパラジウムは割合を変え得るがロジウムの量が0.1未満になると耐久性が劣るので不適当である。触媒においては、 r が0.5以上になると酸素が少なくなり、触媒性能が劣る。また r は必ずしも酸素が0.5以上になることは必要では存在しなかつた。

本発明の触媒はアルミナ等の耐火物からなるペレット状担体またはヘニカム状担体に付着させて用いることが望ましい。担体に付着させる方法はかかる触媒の組成の金属の水溶性化合物の混合水溶液に担体を含浸し、乾燥し、空気中で焼成する方法が良好な触媒を提供する。また従来の製造方法である先に当該触媒組成物を形成せしめた後、

り混ぜ水素雰囲気中 550°C で3時間か焼した後、空気雰囲気中 870°C で1.5時間か焼して酸化物の粉末を得た。生成物は LaTeO_3 のX線解析図と同様の解析図を示した。

上記組成の高活性な触媒を得るために下記に述べるような調整方法を行なつた。

見かけ体積 $600 \sim 650 \text{ cm}^3$ のヘニカム状担体のアルミナコーティング溶液を用いてアルミナコーティングした(アルミナコーティング溶液はアルミナ粉として0.5重量%を含むアルミナゾルに γ -アルミナ粉末をアルミナゾルに対し重量比で15~4.7に混合したものをボールミルで攪拌して調製した)。このアルミナコーティングされたヘニカム状担体を 80°C で4時間温度乾燥した後空気雰囲気中 650°C で3時間か焼した。

硝酸ランタン 24.330 g を蒸留水 360 ml に溶解し、上記のヘニカム状担体をランタン溶液に含浸し、乾燥後空気雰囲気中 750°C で1.5時間か焼してヘニカム状担体上にランタン酸化物を得た。

次に上記焼成した担体を、蒸留水 360 ml 中に溶

特開 昭51-91890(2)

液剤を用いて担体に付着させる方法によると、生成した触媒の性能が前述の方法で製造した触媒の性能より悪い。

担体に触媒を構成する金属の水溶液を付着させる際最初にランタンまたはイットリウムの単独または両者を混合し、その水溶液をつくつて担体に付着させ、焼成することにより担体にランタンまたはイットリウムの酸化物を形成する。しかる後他の金属の化合物の水溶液をつくり、ランタンおよび/またはイットリウムと同様の方法で担体に付着させて焼成することにより触媒を製造する方法は一層好ましい方法である。

本発明を次の実施例および参考例により説明する。

実施例 1

硝酸ランタン 24.330 g 、硝酸ロジウム 3.312 g 、硝酸第1鉄 8.088 g 、硝酸ニッケル 5.810 g 、硝酸コバルト 4.670 g 、塩化パラジウム 1.420 g 、三塩化ルテニウム 1.380 g を適量の蒸留水に溶解し、僅やかに蒸発乾燥した。生成物をモノウ乳鉢にてよくす

硝酸ロジウム 3.312 g 、硝酸第1鉄 8.088 g 、硝酸ニッケル 5.810 g 、硝酸コバルト 4.670 g 、塩化パラジウム 1.420 g 、三塩化ルテニウム 1.380 g を含有する溶液に浸漬含浸し、引きあげた後還元性ガス(硫化水素)中にしばらく放置(24/210で3分程度)した後、水素雰囲気中 550°C にて3時間か焼した。この様に処理した担体を空気雰囲気中 870°C で1.5時間焼成して次の組成

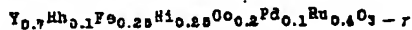
$\text{La}_{0.7}\text{Sh}_{0.1}\text{Fe}_{0.35}\text{Ni}_{0.25}\text{Co}_{0.3}\text{Pd}_{0.1}\text{Ru}_{0.4}\text{O}_{3-r}$ を有する触媒を得た。

実施例 2

見かけ体積 $600 \sim 650 \text{ cm}^3$ のセラミックスヘニカム状担体に実施例1と同様にアルミナコーティング液をコーティングし、約 80°C 温度で約4時間乾燥した後、空気雰囲気中 650°C で3時間か焼して、担体を得た。

次に蒸留水 360 ml に硝酸イットリウム(21.610 g)を溶解し、上記担体を含浸し、空気雰囲気中 750°C で1.5時間か焼し、イットリウムの酸化物を得た。生成したイットリウム酸化物をさらに蒸留水 360 ml

中に硝酸コジウム 3.200g、硝酸第1鉄 11.189g、硝酸ニッケル 8.038g、硝酸コバルト 6.968g、塩化パラジウム 1.963g および三塩化ルテニウム 11.393g を含有する溶液に浸漬、含浸した後、酸化水素雰囲気中 (2l/min 程度) にしばらくさらした。然る後水素雰囲気中 350°C で 2 時間加熱した後、空気雰囲気中 870°C で 1.5 時間焼成して触媒を得た。生成した触媒の組成は



であつた。

実施例 3

見掛け容積 600 cc のセラミックスヘニカム状体を実施例 1 と同様にアルミナコーティング液をコーティングし、約 80°C で約 2 時間乾燥した後、空気雰囲気中 650°C で 2 時間加熱して担体を得た。

次に蒸留水 360 cc に硝酸イットリウム 21.910g、硝酸コジウム 3.200g、硝酸第1鉄 11.189g、硝酸ニッケル 8.038g、硝酸コバルト 6.968g、塩化パラジウム 1.963g および三塩化ルテニウム 11.393g を

含有する溶液に上記担体を浸漬、含浸し、取り出した後、酸化水素中 (2l/min) にさらし、各元素を硫化物として固定した。然る後実施例 2 と同様に処理して実施例 3 と同様の触媒を得た。

参考例

硝酸ストロンチウム $\text{Sr}(\text{NO}_3)_2$ 0.9g、硝酸コバルト $\text{Co}(\text{NO}_3)_2 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 6.1g、硝酸ランタン $\text{La}(\text{NO}_3)_3 \cdot 6\text{H}_2\text{O}$ 7.2g を蒸留水に溶解し、緩慢に蒸発乾燥した。生成物をメノウ乳鉢ですりつぶし、空気中 660°C で 2 時間焼成した。かかる操作で得られたものを平均粒度 3 μm になるように粉砕し、結着材とアルミナゾルを混合しヘニカム状担体にコーティングしさらに常法により焼成した。生成した触媒は $\text{Sr}_{0.2}\text{La}_{0.8}\text{O}_{0.8}$ なる組成を有した。

比較例

実施例 1 および 2 と従来法で製造した従来の触媒組成物である参考例の各触媒を、一酸化窒素 500ppm、炭化水素 500ppm、一酸化炭素 1.5%、水 10.0%、酸素濃度からなるガスを用いて性能評価を行った。尚性能評価は触媒完成時と耐久試験後

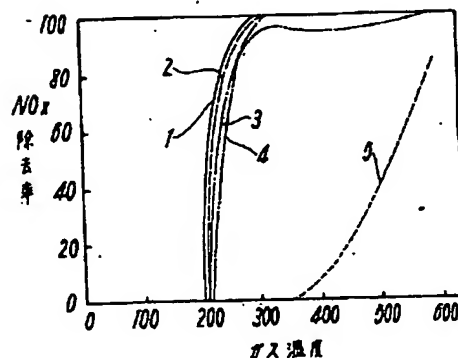
すなわち自動車のエンジンの排気管に触媒を取付け 3 万 km 走行に相当する期間経過後再度性能を評価した。その結果を添付図に示す。但し参考例の触媒は性能が悪く、耐久試験は行わなかつた。

添付図面中曲線 1 および 2 はそれぞれ実施例 1 で得た触媒の初期性能および耐久後性能を示し、曲線 3 および 4 はそれぞれ実施例 2 で得た触媒の初期性能および耐久後性能を示し、曲線 5 は参考例で得た触媒の初期性能を示す。実施例 3 も実施例 1、2 とほぼ同様の性能を示した。

この評価試験でも明らかを如く、本発明の触媒は窒素化合物の除去性能が高く、しかも耐久性が良好であり、排気ガス処理用触媒として極めて有効である。

4 図面の簡単な説明

添付図面は実施例 1 および 2 並びに参考例の触媒の評価試験結果を示す曲線図である。



5. 添付書類の目録

- (1) 明 細 簿 1 通
- (2) 図 面 1 通
- (3) 概 算 本 1 通
- (4) 委 任 状 1 通

6. 前記以外の発明者、特許出願人または代理人

(1) 発 明 者

神奈川 県 横浜 市 金沢 区 大 通 町 4-8-9
栄 重 信 隆

神奈川 県 横浜 市 磯 子 区 中 原 3-3-20
杉 村 秀 一 郎

(2) 代 理 人

所 所 〒100 東京 都 千代田 区 霞 が 丘 3 丁 目 2 番 4 号
霞 山 ビルディング 7 階 電 話 (03) 2241 番 (代 2)

(7206) 氏 名 弁 理 士 杉 村 興 作

BEST AVAILABLE COPY

BEST AVAILABLE COPY